

沖縄を教材とした社会科実践の研究

澁谷 友和

(東大阪市立縄手東小学校)

岩本 廣美

(奈良教育大学社会科教育研究室)

Social-studies education research which used Okinawa as a case study

沖縄を教材とした社会科実践の研究

澁谷 友和

(東大阪市立縄手東小学校)

岩本 廣美

(奈良教育大学社会科教育研究室)

Social-studies education research which used Okinawa as a case study

Tomokazu SHIBUTANI

(Nawatehigashi elementary school, Higashiosaka City)

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

abstract : In this research the students addressed questions and social dilemmas using Okinawa as a case study. Our hope was that during the study of and contact with the people facing these social dilemmas, the students would start to think of these problems as their own, and their willingness to learn about them would mature. Our intention was to put this idea into practice. In the end, the result was that the students' level of concern for Okinawan problems did increase, and they did, in fact, develop their ability to think about social phenomena. Although the students could not visit the subject location and people in person, they were able to communicate with them to a significant degree by using the Internet (via Skype).

キーワード : 沖縄学習 Okinawa-studies 言語活動 language activities
情報環境 information resource 認識の変化 change of impression

1. はじめに

2011年6月22日、各社新聞の1面に「普天間基地移設は辺野古V字で」というような見出しが掲載された。外務・防衛担当閣僚による日米安全保障協議委員会（2プラス2）を米国防務省で開き、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移設問題について、同県名護市辺野古にV字型の1800メートルの滑走路を持つ代替施設建設で合意したという記事である。各社新聞が1面や社説などに取り上げるということは、日本国内で重要記事であるということは察せられるが、本土の新聞（全国紙）¹⁾と沖縄県の新聞では、取り上げられ方が異なる。本土の新聞では「日米、中国台頭に新戦略」（読売）、「日米が対中戦略」（毎日）、「対中国、牽制と関係強化の間で」（朝日）などと、対中国をかなり意識した記事が目立つ。一方、同日の琉球新報を見ると、「普天間移設の期限撤回」「仲井真知事、理解不能だ」という1面の見出しに続き、社説「民主政治蝕む歴史的汚点」、総合面では「正当性を欠く合意」「反発

避け詳細なく」「自然破壊確実のV字 計画変更も再アセス否定」、社会面「なぜ辺野古 裏切り 地元怒りと失望」と地元の強い不快感を示す紙面構成となっている。また、沖縄タイムス社説を見ると、戦後66年過ぎても、地元の意向を顧みないまま沖縄政策を決めてしまう構図はまったく変わらないと指摘し、「仮想敵を念頭に戦略を練る現実主義は正しいのか。沖縄の基地集中は正しいのか。残念ながら議論は深まらない」と述べている。

なぜ、ここまで沖縄側と本土側の視点が違うのだろうか²⁾。単なる一地方と国の間の問題ではなく、全国民共通に理解すべき問題であるが、本土側に『沖縄の実態』という視点が欠けていると思われる。本土側は、沖縄という地域を知っていると思い込んでいるが、実は知らない。だから、本土側の新聞は「対中国」を前面に出し、沖縄のことには少ししか触れず、「外交の問題」であるかのように意識させようとしているのではないかと考えられる。

このような全国紙と地方紙の間に見られる記述の相

違に対し、大阪市大正区で『関西沖縄文庫』を主宰する金城馨氏は、次のように指摘する。「沖縄の痛みを分かち合おうとする運動で、痛みを分かち合った気分になるより、分かち合えないという自覚を持ち、なぜ分かち合えないのかを考えなければならない」とし、「多くの本土の人々は分かち合っているという考え方が多い。」³⁾ 確かに、沖縄が通ってきた歴史や現在置かれている立場を考えると、『沖縄とは分かち合っている、理解している』とは簡単に言えず、沖縄のことを『知りたい・知る』という姿勢で学習を進めることが大事なのだと考えられる。

このように、本土から見ると「沖縄」と、沖縄から見ると「沖縄と本土」では、かなりの矛盾がある。そこで、沖縄の歴史・文化・現在を考え、知る学習—沖縄学習と呼ぶことにする—を通じて、矛盾を見つめ、沖縄の問題を自分たちの問題と考えられるような社会科授業の実践のあり方を考えたい。本稿は、こうした問題意識に基づいて開発・実践した社会科と総合的な学習の時間などを合わせた小学校第6学年の単元「沖縄の歴史・文化・現在を知る中で、平和とは何かを考える」の経過と成果を述べるとともに、言語力を育成する視点から、考察を加えようとするものである。

2. なぜ沖縄を取り上げるのか

まず、沖縄を教材化する意義という観点から検討したい。

「沖縄」という地名を聞いたとき、一般の人々は、どのようなことを考えるだろうか。南の島、青い海、長寿の島、ゴーヤ、エイサー⁴⁾、水族館、さとうきび、豚肉、沖縄そばなど、現在、年間に本土から約543万人の観光客が来島⁵⁾ するという「沖縄ブーム」の中で、「沖縄が好き」「沖縄は楽しい」と多くの人々が思い浮かべる。しかし、先述のように、現在の沖縄の抱える問題や沖縄の悲惨な歴史などを思い浮かべることは少ない。これが、沖縄を取り上げる一つの理由である。東大阪市在住の児童には、距離的に身近な土地ではないが、日本の中の矛盾を映し出している沖縄が、現実に直面している問題など（社会的事象）を教材化することで、大阪・沖縄といった府県の壁を超え、日本という国の問題として考え始めるのではないだろうかというのが授業構想を支える着想の一つである。

もう一つは、沖縄を見つめることにより、アジアとのつながりが見えてくるということである。沖縄県の県庁所在地・那覇市を中心に同心円を描くと、約1,500キロ離れた東京とほぼ同じ円内に、東アジアの主要都市であるソウル、上海、台北、マニラ、香港などが概ね入る。琉球王国時代、現在の中国や東南アジア諸国、日本、朝鮮との間を船で往来し、中継貿易の拠点として繁栄した歴史がある。その中でも、14世紀後半から

16世紀までを大交易時代といい、最も繁栄した時期である。琉球王国の交易船は、現在の中国との関係を保ち盾に、地の利を生かして季節風に乗り、大海を往来した。琉球王が首里城内に掛けた梵鐘に「万国之津梁（架け橋）」⁶⁾ と繁栄をうたい上げたのもこの頃だと言われている。

そのような交易の中で、現在、沖縄の文化を代表するものの一つが伝来している。それは、三線である。三線の原型は大陸で生まれ（中国では三弦）、沖縄に伝わったとされている。先述のように、琉球王国は中継貿易で栄えており、大陸文化が伝わったのは自然の成り行きだったと考えられる。琉球王国時代のいつ伝わったのかは諸説があるが、現在の推測では14世紀から15世紀頃にかけて伝わったと言われている⁷⁾。その後、薩摩や江戸幕府との交流により、本土に伝わることで三味線へと変形していったと考えられている。沖縄の三線を基準にすると、中国の三弦は棹の長さに比べて胴が小さく、本土の三味線は棹が長いという特徴もあり、三線とは違った音色に変化していく。

このように、沖縄を見つめることにより、アジアの中の日本というものが考えられる。国と国のつながりやつながりによって世界が成立していることが感じられる。ここにも沖縄を取り上げる意義があると考えられる。

この二つの視点を大事にしながら教材を工夫し、児童のもつ疑問や課題を取り上げることを中心に学習を進めることとした。児童自身が調べ、考え、人とつながり、考えを練り上げる状況、すなわち『学び方を学ぶ』ための学習の場を設定することで、児童は思考を揺さぶられる。その中で、自ら学び、問題解決に意欲的に取り組み、自分の考えをもつことができ、伝え合う力（言語力）も育まれると考える。これが沖縄学習の意義である。

沖縄学習については、東京都の和光小学校・和光鶴川小学校による先行実践例がある（丸木ほか2006）。1987年から20年以上に渡り「沖縄学習」と題し、実践を重ねている。料理・三線・エイサー・自然・地理・歴史などを事前学習し、沖縄へ修学旅行として出かけ、学びを深めるのが特色である。修学旅行では、沖縄戦の証言者や平和ガイドの先生をはじめ、たくさんの人との出会いを通して学ぶ。また、基地問題に関しても現実を目の前にして学び、自分なりの意見や新たな疑問を持って帰ってくる。そして、それを「沖縄学習旅行記」などにまとめ、学習を深め、広めていくのである。自分たちが学びたいと思うことを、現地に行き見学・調査・聞き取りができるこの和光小学校の実践は、多くの示唆を与えてくれる。

この和光小学校のように、沖縄に修学旅行へ行くことのできる小学校は少ない。確かに、沖縄の現地で学ぶ価値は計り知れないほど大きいだろうし、学習も深

まるであろう。だが、本土の公立小学校にとって、修学旅行で沖縄を訪問することは一般的ではない。沖縄へ訪問はできないが、沖縄から学ぶことの意義を損なうことなく、学習を深めることができるはずである。今回の実践では、このことも意識した。沖縄へ訪問はできないが、証言者や現地の人々とのコミュニケーションが最大限とれるように工夫したのも、本実践の特徴である⁸⁾。その中でも、沖縄の児童と東大阪市の児童が、インターネット電話サービス「スカイプ」を通して会話ができるように、沖縄の小学校と澁谷の実践校の双方が情報環境を整備⁹⁾したのは大きな特徴である。幸い、澁谷の依頼に応じて、沖縄では、読谷村立古堅南小学校（以下「古堅南小」と記す）¹⁰⁾が交流に協力してくれることになった。

澁谷が勤務する東大阪市長縄手東小学校（以下「縄手東小」と記す）¹¹⁾では、東大阪教育センターや読谷村教育委員会から支援を受け、古堅南小とスカイプでの交流を開始して1年になる。沖縄の人の思いや考えを聞くなかで、新しい発見をし、学びを深めている。このスカイプの活用が、沖縄から学ぶことの意義を損なうことなく、学習を深めることの一つの手段となっていると考えられる。

3. 開発・実践の内容

これまで述べてきたことをもとに、2009年8月から

2010年8月にかけて、関連文献収集・検討及び関係者へのインタビューなどを進め、沖縄を教材とした授業の構想を作っていった。テーマ、実践学年、教科等の位置づけ、目標は以下の通りである。

- | | |
|-----|--|
| (1) | テーマ「沖縄の歴史・文化・現在を知る中で、平和とは何かを考える」 |
| (2) | 学年・教科 6 学年社会科・国語科
6 学年総合的な学習の時間 |
| (3) | 目標 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ 沖縄の歴史・文化を学ぶことにより、沖縄の良さや豊かさを知り、自分たちの生活の中にかかしていくことができる。 ・ 沖縄戦の様子を文献資料やインターネットなどによって調べたり、体験者に語ってもらう中で、沖縄戦の具体的な事実を発見し、戦争の悲惨さを知る。そして命の尊さを実感し平和を求める心情を育てる。 ・ 沖縄の今現在を見つめ、沖縄の抱えている問題は何かと考え、沖縄の方々との交流の中で学び、日本全体の課題としてとらえ、調べたいことや伝えたいことを卒業論文¹²⁾にまとめる。 |

2010年度の2学期から3学期にかけて、社会科と総合的な学習の時間、国語科を合わせて、全58¹³⁾時間を充当して学習を進めた。社会科に関しては、年間配当時間が105時間で、そのうちこの実践には、22時間を費やした。現行社会科学習指導要領第6学年の大単元「戦争から平和へ」を発展的に扱って開発実践した。学習の流れをまとめたものが図1である。

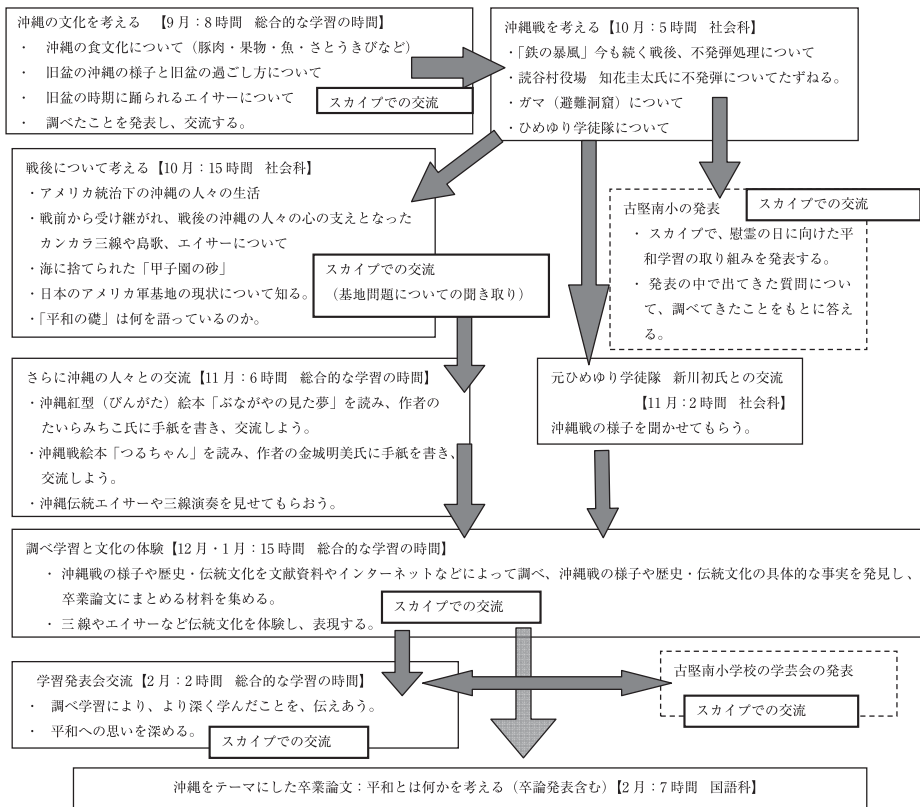
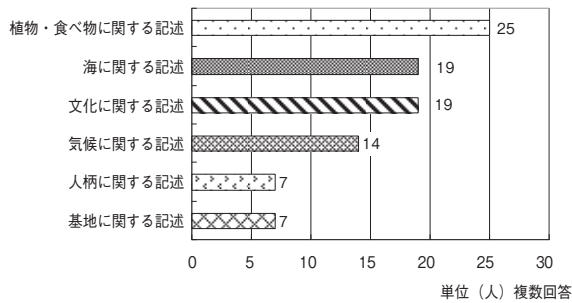


図1「沖縄の歴史・文化・現在を知る中で、平和とは何かを考える」授業構想図
(点線で囲んだ部分は、古堅南小学校の活動を示す)



(図2) 児童の持つ沖縄のイメージ

4. 授業実践の主な経過

4. 1. 児童の沖縄観

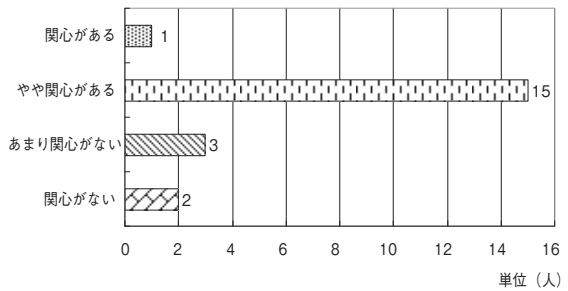
6年生児童が持っている沖縄学習前の「沖縄」のイメージ、そして関心はどのようなものだろうか。2010年9月6日に実態調査を実施した。その結果をまとめたものが図2と図3である。

学習前の児童の持つ沖縄のイメージは、前述の一般の人が持つイメージと同じであることがわかる。「とてもきれいな海がある」「気温がとても高く、台風が多い」「赤瓦の屋根」「さとうきびがある」「サンゴがきれい」「屋根にシーサーがのっている」といった、5学年社会科の学習で学んだと思われる記述が多く見られた。また、「みんな穏やかそう」「自分たちの知らない方言がある」「近くでは見かけない名字がある」「エイサーや三線など独特な文化がある」「服が独特」「かりゆしウェア」のことを言っていると思われるなど、これまで知っていた情報からイメージをすでに持っていることも推察される。このように、沖縄に対して、明るく楽しい雰囲気イメージを持っていることがわかる。逆に、沖縄の現実問題に関しての記述は少ない。「アメリカの基地がある」という記述が7件だけあった。

沖縄に対して明るく、楽しいイメージを持っている児童であるが、では、沖縄へはどのくらい関心を持っているのかとみると、やや関心がある、がもっとも多く、あまり関心がない、関心がない、を合わせると、積極的な関心を持っていないことがうかがわれる。しかし、授業を進める中で児童の沖縄観が変化していく。

4. 2. 人とつながる中で見えてくる沖縄

今回の授業実践の中で、これまで述べてきたことの他に工夫したのが、沖縄と関わりのある人々から、直接学ぶ場面を数多く設定したことである。教室内で児童と教師の間だけで話し合うのではなく、一般社会の人々の意見を教室内に持ち込むことで考えが深まる。沖縄戦を体験した人、沖縄で現在暮らしている大人や同世代の人との交流の中で、確かな根拠に基づいた具体的な話を知ることは、思い込みや誤解を修正し、沖



(図3) 児童の沖縄への関心

縄の実際を知ることにつながる。

そして、その人々から発せられる熱意ある意見を聞き、沖縄の人たちが沖縄の問題を真剣に考えている様子に気づくことにより、社会の問題を前向きに捉え、自分たちの問題でもあるのだという自覚を育てることにつながるのではないかと考える。

事例1：読谷村役場 知花圭太氏との交流

読谷村は、沖縄本島の中部に位置し、東シナ海にカギ状に突き出た半島で、人口4万人余り（2011年5月）の村である。村の北には景勝の地「残波岬」があり、美しい自然が多く残る。

美しい自然が多く残る半面、今なお村域の約36%を占める米軍基地施設を抱える¹⁴⁾。かつてパラシュート降下訓練に伴う事故などもあり、平和の村作りに力を入れている。読谷村ホームページ上に、読谷村の戦跡めぐりや読谷村バーチャル平和資料館を開設¹⁵⁾するなど、行政の側から平和教育に力を注いでいる村である。その平和行政を担当しているのが知花氏である。

知花氏とは、現在も続いている不発弾の処理について交流をもった。不発弾についての疑問を児童が手紙を書き、それについて返事をもらうという形式をとった。児童が不発弾について疑問を持ったのは、次の4点である。

- ① 不発弾の威力は戦争当時のままなのか。
- ② 不発弾の処理の仕方について。
- ③ 今、沖縄本島にある不発弾を完全に処理できるまで、何年ぐらいかかるのか。
- ④ 不発弾と背中合わせの生活での気持ち

この4つの疑問に対する知花氏の回答は、児童の予想を大きくくつがえすものであった。不発弾の威力は、戦後65年以上経っているので、クラスのほとんどの児童が弱まっているだろうという仮説を立てていたのに対し、知花氏からの回答は「威力は当時のまま」であった。さらに、不発弾の処理に関しては、遅くともあと10年ぐらいと考えていたのだが、今後70年以上の歳月が必要だと言われているとの回答に、児童は驚きを隠せなかった。自分たちの思いとあまりにもかけ離れた回答に、沖縄の現実を目の当たりにすることと

なった。

知花氏からの回答の結びに、不発弾と背中合わせの気持ちについて、多くの県民が考えていると思うが、あくまでも個人的な意見としながら、次のように記していた。その部分を抜粋する。

戦争終結から65年経過するにもかかわらず、不発弾に代表されるように戦後処理がまだ続いている現状について、多くの県民は戦後がまだ終わっていないと感じていると思います。

土の中には不発弾、空には戦闘機、海にも戦艦という具合に、県民が多くの脅威にさらされる現状は異常だと思います。この多くの脅威が、本土から遠隔の地にあるために他府県民の目に映ることなく、見過ごされてきた経緯もあると思いますが、不発弾などの「負の遺産」が将来の子ども達に受け継がれていかなく、何が出来るか考え、行動することが今とても大切だと考えています。

事例2：元ひめゆり学徒隊 新川初氏との出会い

沖縄戦で看護要員として動員されて、多くの犠牲者が出た「ひめゆり学徒隊」の生存者のうち唯一、関西で暮らすのが、新川初氏である。

ひめゆり学徒隊は、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒222人と教員18人の計240人で構成された看護部隊で、1945年3月23日に、沖縄陸軍病院第一外科壕に配属される。その時、新川氏は18歳であり、その体験を、児童の疑問への回答も含めながら語ってくれた。児童が持った疑問は次のようなものである。

- ① なぜ、女子学生たちは戦場へ向かったのか。
- ② ひめゆり学徒隊はどんな活動をしていたのか。
- ③ 沖縄戦戦場の様子はどのようなものか。
- ④ 記憶に残っている出来事はどのようなものか。
- ⑤ 大切な命とは…今の人たちに何を伝えたいか。

児童も、そして多くの大人たちも、女子学生たちの学徒隊は、看護要員として軍人の看護にのみ当たっていたと思いがちであるが、新川氏の話によると、ツルハシで高射台作りをしたり、弾薬や缶詰が詰まった30kgほどの木箱を担いだりと、看護の他にも活動が多岐にわたっていたという事実を児童は知る。最も過酷だったのは食料調達であり、米を入れる樽を抱え、山を二つ越えた先の炊事場までの往復だったそうである。そのような過酷な作業にも耐えられたのは、日本が負けるとは考えもせず、勝利を夢見て必死だったからと語る。

その新川氏も戦場で負傷し、ひめゆり学徒解散命令の後、戦中の捕虜になってはいけないという教えを守り、同級生たちと自決を計る。同級生が手投げ弾

の安全ピンを抜き、手投げ弾の上へ何人も乗りかかるという行為を2度繰り返したが、いずれも不発で、数日後に米軍の捕虜になったという所で話は締めくくられる。新川氏の話聞いて、後日、児童が感じたことを手紙に書いた。以下に、2名の記述例（抜粋）を示す。

- ・本やパソコンなどではわからない体験した方の本当の気持ち、本を読んで感じることに新川さんに直せつ話を聞くのでは、とても感じ方がちがいました。
- ・沖縄戦では、多くの学友を亡くした悲しみもあるという事はわかっていましたが、沖縄学習の中でも大事なことであったので、語ってくださってありがとうございます。今まで、沖縄戦のイメージは、うっすらとしかなかったけれど、お話を聞いて、自分の中のイメージがはっきりしました。とくに、ガマの中、戦場の様子がとてもくっきりしました。

新川氏は、多くの学友を失った中、自分だけ生き残ってしまっていることに、常に罪悪感を持っていると語っている。

その気持ちにも触れながらの手紙が多くみられた。そして、児童は、本当の意味で命を大切にし、人の命も大切にできる人になっていけるよう努力していきます、と新川氏に誓っていた。

新川氏は、現在の沖縄についても言及する。「米軍基地が集中する沖縄が、再び戦争に巻き込まれない心配だ。戦争を知らない世代に、体験談を通じて、不戦の気持ちを強く持ってほしい」そのようなことを願いながら、これからも体験談を語り続ける。

事例3：読谷村立古堅南小学校との交流

古堅南小とは、児童と児童の交流をはじめ、教師と教師の交流、縄手東小児童と古堅南小の保護者との交流というように、文通やスカイプ、アンケート調査の実施など幅広く交流を持つことができた。

この交流の中で、沖縄の文化のことをはじめ、様々なテーマで文通、スカイプで交流をしたが、ここでは、米軍基地に関する学習の際の交流を中心に紹介する。

全国の米軍軍事施設の約75%が沖縄に集中している（太田2000）が、古堅南小の東側にはアジア最大の米軍基地である嘉手納基地が存在している。戦闘機の騒音は日常化していて、古堅南小の児童にとっては、基地の存在自体が日常化していると言っても過言ではない。その嘉手納基地を学習の中心として扱った当初に、縄手東小の児童が感じたことは、「うるさそうだな」とか「危なそうだな」、さらに「戦闘機すごいねん」というものであった。当然であるが、基地を背に生活をしていないから、実感がない。そこで、基地が近くにある状況を、スカイプを通して聞くことにした。以

下に、その時の会話（抜粋）を示す。（Nは縄手東小児童、Fは古堅南小児童を示す）

N₁ 「基地が近くにあると、うるさいですか。」

F₁ 「授業中でもうるさい。自然と声が大きくなるね。」

F₂ 「教室の窓が二重になってる。」

N₂ 「なんで二重なん。」

F₃ 「一重ではうるさいし。窓が開けられない。」

F₄ 「だからクーラーもある。」

N₃ 「いいなあ。うちの学校はないや。」

（後、少し雑談が入り終了する）

このスカイプの後、児童に、基地の移設が問題になっているが、大阪府下にある関西国際空港に移設されようとしたらどのように思うかと問うてみると、「そんなこと絶対に許されない。」「自分の住んでいるところにはいらない。でも、なくすと外国が攻めてくると、家の人が言っていた。」「学校のそばを飛んでいくだろうから、うるさくていやだ。だから、基地はいらない。」などと、クラスの児童全員が反対の意見を唱えていた。しかし、交流している古堅南小の近くには嘉手納基地があるということを再確認すると、黙り込んでしまった。自分たちと同じ同級生が、今までの議論を聞いていたらどう思うだろうということを感じ、古堅南小の人たちははじめ、沖縄の人たちに、少し寄り添えた瞬間だった。

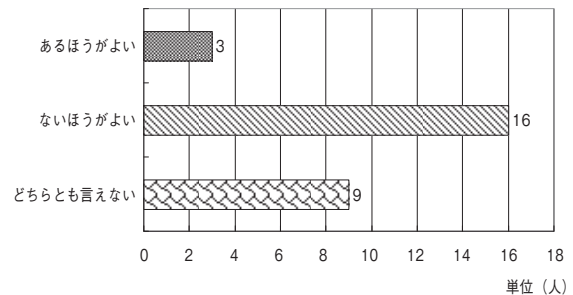
「では実際、沖縄の人は基地に関してどのように思い、考えているのだろうか。」という発言が児童の中から出てきた。本土のメディアがあまり取り上げない沖縄の人の実際の思いをもっと聞き、深めたいという学習意欲が児童の中に芽生えてきた。

そこで、児童が文通相手に手紙で聞き取りをしたり、交流しているクラスの児童及び保護者に米軍基地に関するアンケート調査¹⁶⁾を実施することを計画した。アンケート調査で、縄手東小の児童が知りたいと考えた3つの内容は、次のようなものである。

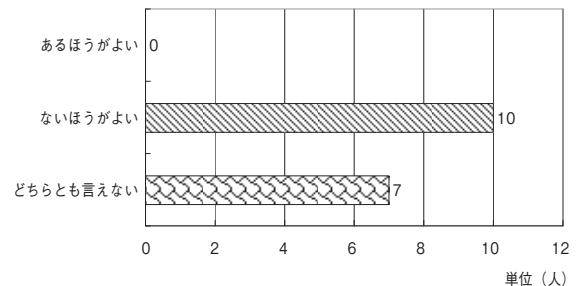
- ① 沖縄県に米軍基地があることに関して、どのように考えているのか。
- ② 沖縄県に基地はあったほうがいいのか、ないほうがいいのか。
- ③ 基地問題に関して、沖縄と本土で考え方の違いがあると思うか。

設問①の米軍基地に関して考えていることは、予想していた「音がうるさくて困る」との記述が児童、保護者ともに目立ったが、中には、「米兵による事件・事故が大きく取り上げられるが、日本人も同じようなことをしている。ニュースの大きさが違うのは、やはり日本や沖縄が、彼らに対してとても過剰に敏感になっていると思う。私は経済面・治安面（他国から侵略）から考えても、基地があっても良いと思う。」（30代保護者）という意見や、「日本にある米軍基地

の75%が小さい島沖縄に集中してあるのは、普通にとっておかしいことだと思います。納得できません。いつまで沖縄の人たちが基地を負担していかないといけないのか。やりきれない気持ちでいっぱいです。」（40代保護者）のような意見もみられた。また、児童の意見の中には、「普天間基地移設問題とかがあって、別の県の人たちは、移設にさんせいしているくせに、いざ、自分の県に基地をおこうとしたら、反対するところがぎもんに思う。」というものもあり、もっと穏やかな感じでの返答を期待していた縄手東小の児童は、少し驚いた様子であった。しかし、沖縄の人たちの現地の声はまだまだ続き、児童は困惑と、悩みを抱えることになる。それは、設問②の沖縄に基地があったほうがいいのか、ないほうがいいのかという設問に関してである。設問②に関しては、縄手東小の児童は、自分たちと同じように、ないほうがいいのかという回答が100%だと想定していたのだが、それが覆る結果となった（図4・図5）。



（図4）沖縄に基地は必要か（古堅南小児童回答）



（図5）沖縄に基地は必要か（古堅南小保護者回答）

この結果に縄手東小の児童は、自分たちの考えを練り直しせざるを得ない状況に追い込まれることとなる。

練り直しをする時に、それぞれの意見の理由が参考になった。縄手東小の児童が最も驚いていた「あったほうがよい」という理由であるが、「ぼくのお母さんは基地で働いていて、友達もとても多いし、友達がとてもやさしいから」であるとか「基地があるおかげで、その土地の所有者にもお金が入るし、その基地で働いている人もいるから」という、基地で収入を得て暮らしているから「ないと困る」という理由である。

同じ理由は、どちらとも言えないという意見の児童、

保護者にもみることができる。「家族が現在、基地内で働いていて、それが家の収入なので、なくなると考えるとどちらとも言えない」(40代保護者)や「飛行機の騒音や外国人の犯罪があるたびに、基地なんて無くなればいいと思いますが、基地内で働いている方々の職やアメリカ人との交流を考えると無くなってほしくないと思っています」(20代保護者)、「基地があることによって、米軍の事件が多くあります。それでも、日本はアメリカのいいなりで、何もできません。でも、沖縄は就職難で、基地で働く人も大勢います。よってどちらとも言えません」(30代保護者)というような、身近な人の雇用を気にする記述や沖縄全体の失業率を意識した記述が目立った。児童の記述も同様な理由であった。

縄手東小の児童は、このような視点が欠けていたことに気づかされたのである。基地は必要ないという意見は当然であるし、「夜中に飛行機の爆音のせいで眠れない。だから、基地はないほうがいい」(30代保護者)「事故があったりするからないほうがいい」(児童)と、どれも納得できる理由で、縄手東小の児童も想定していた理由である。しかし、基地により収入を得て生活していて、無くなると生活できなくなる人がいるという事実、基地があるために生活が成り立っている人もいるということを知ることにより、基地の問題が、ただ単に「あるほうがよい」「ないほうがよい」という議論にとどまらなないと知り、考えを深めることとなった。

本土の人たちの多くは、戦闘機の事故や米兵による事件があるため、「危険だからないほうがよい」という意見を持っていて、それは当然の意見である。しかし沖縄に住んでいる人たちも、ないほうがいいと考えるが、生活が関与しているから、なくしたほうがよいとは簡単に言えないというジレンマに陥っている本質を見ないと、考えが深まらない。また、この交流を支えてくれている古堅南小教員の嘉陽葉々氏や嘉納より子氏は、なぜ沖縄だけがつらい思いをしなければならないのかとしつつも、「普天間基地移設において、自分たちだけがつらい思いをしているのだから他の県に」という考えはベストなのか。だからといって県内移設に賛成するわけでもありません。この沖縄に戦争をするための訓練をしている人がいる。そう考えるだけで恐ろしくなります。雇用や財政の問題など、基地の問題が深くかかわっているのも事実ですが。」と、児童と接する中でのジレンマを語ってくれた。だから、基地問題は、さまざまな角度から検証しなければならず、検証をしっかり重ねたうえで、基地をなくしていく議論をしていかなければならないと気づくことができた学習であった。

4. 3. 卒業論文の取り組み

平成20年版小学校学習指導要領総則には、個性を生かす教育の充実に努め、その際、児童の言語活動を充実するようにしなければならないと記されている。その中でも、自分の意見を伝えるためには、まず自分の言葉で書くということが大事であるということを重視し、これまで学んだことをテーマに卒業論文を作成することにした。400字詰め原稿用紙10枚以上を目標とし、自分でテーマを設定し冬休みから1月にかけて書いた。児童が論文に取り組んだテーマは、次のようなものである。

- ① 沖縄にある米軍基地の問題点（辺野古への基地移設問題）
- ② 沖縄戦（沖縄をめぐる日本・アメリカの戦略）
- ③ ひめゆり学徒隊（なぜ、女子学生たちが戦場に行ったのか）
- ④ チビチリガマとシムクガマ（両ガマの結末）
- ⑤ なぜ、一般住民の犠牲者が多かったのか
- ⑥ 平和の礎（なぜ国籍に関係なく名を刻むのか）
- ⑦ 沖縄に埋まっている不発弾
- ⑧ 沖縄の踊りエイサー（沖縄と大阪のエイサー）
- ⑨ カンカラ三線（三線に込められた思いとは）
- ⑩ 紅型絵本「ぶながやの見た夢」から沖縄をみつめる（作家たいらみちこ氏がこめた思いとは）

卒業論文に取り組むやすくするために、あらかじめ、各テーマで3～5つの章に分けて、その章の題も決めておいて書くように指定しておいたので、比較的書きやすくなっていたようである。例えば、沖縄にある米軍基地の問題点の卒業論文であると、第1章「沖縄にある米軍基地の現状」、第2章「米軍基地の問題点」、第3章「なぜ、沖縄に集中しているのか」、第4章「普天間基地移設問題」、第5章「考察」という章に分けておいた。卒業論文といっても、資料をそのまま写していたり、スカイプで古堅南小の児童から聞いたことをそのまま書いていたり、本来の意味での論文にはまだまだ程遠いものであるが、自分の伝えたい部分を選んで書いたりするということではできたと考える。中には、論文を書くなかで、自分の伝えたいことが明らかになってきて、次のように、自分の意見で考察を書くことができる児童もでてきた。

ぼくが基地について思ったことは、いくつかある。

まず、日本本土は沖縄を捨て石にしているということ。先日ニュースでは、仙石長官が、「基地は沖縄に甘受していただく。」というような発言をし、沖縄県民の怒りにふれた。本土の人は、「住民のことを考えると、基地を受け入れることはできない。」と言うが、沖縄は住民の許可なしに基地がどんどん造られていく。

日本本土の人は、沖縄を日本であって日本でないような見方をしていると思う。それがわかっていれば、日本本土の人々も基地を受け入れると思う。

そうすることによって、基地問題に対する、日本本土の住民の考え方と行動も変わってくると思う。

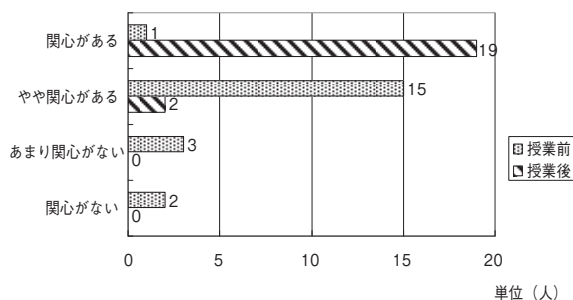
ぼくも、もっとこの沖縄米軍基地問題という日本の抱える問題と向きあわなければならないと思う。

でも、一番大切なのは、基地の必要性をなくすることだと思う。そのために、戦争をなくし、世界の国々がもっと豊かに、もっと仲良くできれば、それでいいと思う。そして、沖縄県民の願いである、「基地なき沖縄」になってほしい。

5. 成果と課題

5. 1. 児童の沖縄観の変化

証言者や現地の人々とのコミュニケーションが最大限とれるように工夫したり、卒業論文を書くことで、児童の沖縄への関心は確実に変化してきた様子が見られた。このことを明らかにするために、2011年2月28日に実態調査を行った。その結果が図6である。



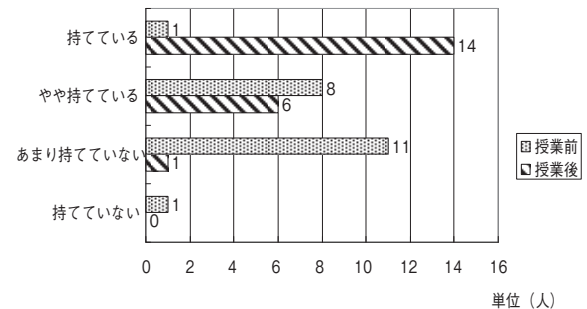
(図6) 児童の沖縄への関心の変化

ほとんどの児童が、学習中だけではなく、学習が終了しても沖縄への関心を維持していることがわかる。事実、小学校を卒業してからも、古堅南小の児童と手紙やメールのやりとりが続いているという報告もある。さらに、その関心の視点であるが、学習前は植物

や食べ物に関するものや、文化、気候、海に関する記述が中心であったが、学習後は「沖縄戦で苦しみ、捨て石にされてきた。65年たった今でも基地は残っている。人ごとではなく日本中の問題として考えたい。」

「美しいさんご礁の横に、沖縄には負の遺産が残っている。日本中はまだまだ平和ではない。命の尊さと平和の大切さが学べた。」という沖縄の社会的現実を直視する記述が目立った。

5. 2. 自分の言葉で伝えあう力を育む社会科の授業



(図7) 学習の中で自分に考えが持てているか

沖縄への関心が高まる中、課題を解決するために必要な思考力の高まりも育むことができた(図7)。沖縄という大きなテーマで、学習前は、児童にとってはあまり身近ではない教材であったが、歴史、文化、現在の姿という幅広くさまざまな角度からの切り口で単元を構成したことにより、学習意欲を向上させ、自分たちの考えを持つという態度を形成できたのではないかと考える。また、沖縄の人々との交流が、自分たちの考えをもつ大きな要因にもなっている。「つながってくれた人は、誰もが沖縄と真正面向き合っている人ばかりでした。沖縄を見つめる中で平和とは何かを考え、その人たちに会えたから、沖縄のことを知り、考えられたと思います。」というような感想が複数あったことから、人とつながり、その人たちに疑問を話し、聞くという中で、自分たちの考えが深まったのであらうと考える。

このように見てくると、社会科の授業で大事にしなければならないことは、「人々との出会いの中で、物事の本質や矛盾する事実に向き合わせ自分の考えを持たせること」であると考えられる。すなわち内発的な問題意識を高めることである。社会的ジレンマと呼ばれる矛盾や対立場面に出会うことで児童なりに悩み、苦しみ、思考する場面を作ることが、言語力を身につける場である(寺本2009)。今回の沖縄学習の中の一例では、「沖縄に基地はいらない。でも、自分の身近に移設されたら困る。そのような基地を抱えて生活している沖縄の人の現実」というように、現実社会に起きているジレンマを社会科は扱うことができる。このようなジレンマに対峙すると、児童は、明確な答えを見つ

けることは難しいと感じながらも思考を始める。そして、その現実にとらわれている人たちに思いを寄せる。さらに、今回は卒業論文を書く取り組みの中で、自分自身の考えを練り直し、深めることができたと思う。練り直し、深めるという作業が、「自分の言葉で伝えよう力」の育成に一定の成果をあげることができたと思う。卒業論文発表会のプレゼンテーションでは、練り直し、深まったという内容の濃い発表会になった。平成20年版学習指導要領の中にある言語活動の充実という点、児童が活発に自分の意見を口頭で発表し合う授業がイメージされやすいが、言語活動の充実をそのような聞く・話す面だけで考えることはできない。言語活動の充実が成立する過程の中で、自分の考えたことを書くという作業は欠かせない。書く・練り直し深める・書くという指導が基本的な流れとなるはずである。児童なりに、練り直し深める中で、学習問題に対する自分の考えを根拠と解釈を加えながら、自分の言葉で表現できるようになってくることを、今回の実践によって確認することができた。

5. 3. おわりに

今回の沖縄学習では本土から沖縄を見つめ、沖縄の人々に寄り添い、沖縄の人々の思いを大事にしながら学んできた。その中でも、スカイプを活用し沖縄の児童と直接会話することにより、同級生が置かれている立場を認識できたことは、自分の考え方を見直す柱となった。自分が抱いた疑問を相手に話をし、それに対する即答を得られるということは、認識を深める手段としては大きいのではないかと考える。このことは、スカイプを活用した大きな効果だと考える。今後の課題としては、沖縄の児童と大阪の児童と協同して学ぶ場面を作る必要があると考える。本土側の「自分の近くには基地は来て欲しくない」、沖縄側の「基地のおかげでたくさん問題を抱えている」「しかし働いている人もいますので、その人たちの職はどうしたらいいのか」など、スカイプを活用して、相手の意見を丁寧に聞いたり、立場の違いを理解したり、時には互いに批判をし、時間を共有しながら議論をさらに深めていく場面を作ることが大事である。そうすることで、言語活動がより充実すると考えられる。

付記

本稿は、①澁谷が素稿を作成する、②岩本が修正意見を加える、③澁谷が②をもとに全体を修正する、という手順で作成を進め、②③を3回以上往復して完成に至ったものである。

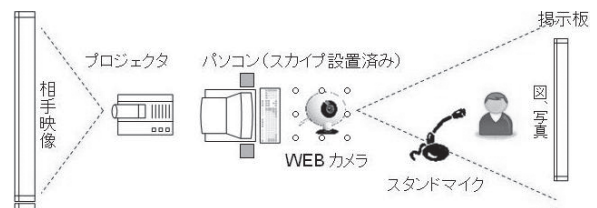
澁谷が勤務校で実践を進めるに当たっては、木田志津男校長をはじめとする勤務校の先生方、東大阪市教育センター、読谷村教育委員会、同村立古堅南小の嘉

納より子先生および嘉陽菜々先生（いずれも実践当時）他、多くの方々に協力いただいた。英文要旨作成に際しては、東大阪市ALTのJames Catt氏の協力をいただいた。

本稿の文責は澁谷が負うものとする。

注

- 1) 全国紙は、大阪本社版を参照した。
- 2) ここでいう沖縄とは、とくに断りのない限り、沖縄島のことをさす。また、本土とは、沖縄県を除く他の都道府県を総称して呼ぶものである。
- 3) 2009年9月22日、澁谷が金城氏にインタビューした際の発言。
- 4) 沖縄本島および周辺離島の盆踊りのこと。
- 5) 沖縄県庁観光政策課のホームページが公表している資料による。2011年10月10日検索
<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=233> <http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=233>
- 6) 中継貿易国家として繁栄をきわめていた当時の琉球王国の気概を示す有名な梵鐘で、現在沖縄県立博物館に展示されている。
- 7) 中国から伝来した三線は、当初はいわゆる宮廷楽器として定着。土族男子の嗜みであったとされる。
- 8) 本文中の方々以外にも沖縄絵本作家の金城明美氏、紅型絵本作家たいらみちこ氏との交流を持った。
- 9) スカイプは、スカイプのソフトをインストールしたパソコンとWEBカメラ（今回はロジクール社製を使用）を準備すると利用できる。パソコンの画面をプロジェクタに接続したり、TVに接続すると相手映像が大きくなるため、今回の交流でも活用した。読谷村教育センター本田氏（当時）作成の図を以下に示す。



- 10) よみたんそんりつ ふるげんみなみしょうがっこう。沖縄県中頭郡読谷村字古堅612-1 全校児童数 702名（平成23年4月8日現在）
- 11) 大阪府東大阪市河内町2-6 全校児童数 295名（平成23年9月12日現在）
- 12) 本来の卒業論文の意味ではなく、小学校を卒業する前に書く文章という意味で使用している。平成20年版学習指導要領の第6学年国語科の目標である「目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全

体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身につけさせる」という部分をねらいとしている。

- 13) 全58時間の他に、休み時間に手紙を書いたり、エイサーや三線、プレゼンの練習をしたりしていた。
- 14) トリイ通信施設、嘉手納弾薬庫施設など1,261haの軍用地が存在している。
- 15) 読谷村役場ホームページ <http://www.yomitan.jp/> 2011年10月16日検索
- 16) 2010年12月下旬に調査票を送付し、記入してもらったものを返送してもらうという形で実施。6年2組嘉陽菜々氏のクラスで児童・保護者に対して実施。児童は32名のうち28名、87.5%の回答で、保護者は32家庭のうち17家庭、53%の回答であった。

文献

- 野里洋、『癒しの島、沖縄の真実』、ソフトバンク クリエイティブ、2007年、pp.7-12
- 高良倉吉、『琉球王国』、岩波書店、1993年、pp.78-86、pp.110-112
- 渡邊欣雄ほか編、『沖縄民俗辞典』、吉川弘文館、2008年、pp.72-73、pp.232-233、pp.442-443
- 丸木政臣ほか監修、『沖縄に学ぶ子どもたち』、大月書店、2006年、pp.7-17
- 伊波園子、『ひめゆりの沖縄戦』、岩波書店、1992年、pp.14-31
- 大田昌秀、『沖縄、基地なき島への道標』、集英社、2000年、pp.36-64
- 寺本潔・嘉納英明・山内かおり・道田泰司、『言語力が育つ社会科授業』、教育出版、2009年、pp.88-91